分野別研究組織成果報告（2021 年度）

環境変化が非対面コミュニケーションに及ぼす影響に関する研究

Research on the effects of environmental changes on non-face-to-face communication

横井　豊彦（Yokoi Toyohiko）

先行研究からは、ICT デバイスを介したコミュニケーションは、課題発見・解決型となり、話題が焦点化される可能性が示唆される(大坊、1993)ため、解決過程の短い課題には有効である可能性が示唆される。その一方で、生活に密着した長期的な課題、例えば地域創生や健康政策についてのコミュニケーションにおける両者の違いは、明らかでない。また、課題発見・解決型になる理由も、明確とは言い難い。また、コミュニケーションに関わる特定の人が、意図的に情報の「出し方」を調節することで境界を生成するという指摘もなされている(青山，2010)。

概ね、このような差異の認められる、対面・非対面のコミュニケーションであるが、対面のコミュニケーションが阻害される状況が生じた際に、非対面のコミュニケーション中心に運用せざるを得ない際には、どのような変化を遂げるのか。特に制約を受ける対面の場面に着目して変化を分析した。

分析対象は、某県にある教育系ＮＰＯのメンバー2 名で、分析手法はインタビューを用いた。1 名は創設時からのメンバー（A）で、もう 1 名はある時期以降継続的に関わっているメンバー（B）である。この 2 名は以前、対面のコミュニケーションが阻害される状況がない時にインタビューを行った経緯があり、対面のコミュニケーションが阻害される状況が生じてからの変化についても聞き取りが可能と考えられたため、対象とした。

インタビューからは、メンバーA は「以前は対面のミーティングだと、ある案件について、途中で未来構想が入ったり、過去の振り返りが入ったりすることが多かったが、制約が生じてからは、そういった『案件に付帯する、過去の経験や未来展望』を含めた部分が会話から減少し、『今年、その案件をどうするか』ということに注力した話の進め方になった。以前だと、何か課題解決に注力することは、非対面の web ミーティングで出来ることであるし、対面のミーティングではアイデアの出し合い、課題の絞り込みやブラッシュアップをしていこうという雰囲気を感じたが、その余裕がなくなっていると感じる。」と述べ、メンバーB は「元々遠隔地での活動が中心な上に、メンバーの居住地がバラバラということもあり、非対面の web ミーティングをすることには慣れていて、対面の時は和気藹々と様々な角度からの話をしていたものですが、制約が生じて以降は結論をまず出そうという雰囲気に変わっているような気がする。」と述べている。

複数年、同じ団体に関わる場合、制約を受けた場合に、対面のコミュニケーションが変化する可能性は認められた。その変化が、先行研究(青山，2010)にあるように、何らかの「境界」の生成によるものなのか、さらに分析を続けたい。